

資 料

臨床講師と教員による協働演習が 臨床講師の実習指導に及ぼす影響 —協働演習への参加群，不参加群との比較—

Impact of Clinical Training Instructor's Teaching Methods
who Attended Basic Nursing Skills Practice with Faculty of School of Nursing

河野かおり¹⁾ 茅島 綾¹⁾ 板倉朋世¹⁾ 遠藤恭子¹⁾ 仁戸部富恵²⁾
小松富恵³⁾ 佐藤君江³⁾ 稲葉孝子³⁾ 秋元ますえ³⁾

Kaori Kono Ryo Kayashima Tomoyo Itakura Kyoko Endo Tomie Nitobe
Tomie Komatsu Kimie Sato Takako Inaba Masue Akimoto

1) 獨協医科大学看護学部

2) 獨協医科大学 SD センター

3) 獨協医科大学病院看護部

1) Dokkyo Medical University, School of Nursing

2) Dokkyo Medical University, Staff Development Center

3) Dokkyo Medical University Hospital, Nursing Department

要 旨

【目的】実習指導者（臨床講師）と教員による協働演習が実習指導者（臨床講師）の実習指導に及ぼす影響を明らかにする。

【方法】A 大学病院に勤務し，基礎看護学実習と領域別看護学実習の実習指導者を対象とした。基礎看護技術演習に参加した者を演習群，不参加者を対照群とした。基本属性（年齢，性別，看護職経験年数，看護専門教育の最終学歴，実習指導者講習会受講の有無，実習指導経験年数，協働演習参加回数），実習指導内容について無記名自記式質問紙を用いて調査した。質問紙は回収箱にて回収した。選択式データは基本統計量を求めた。倫理的配慮として，獨協医科大学看護研究倫理委員会にて承認を得た。

【結果】学生の特性の把握，目標の達成度の確認，学生個々に合わせた実習指導，病棟内の看護技術の方法の統一，教員との指導の一貫性については，演習群のほうが対照群に比べて多かった。一方，計画性のある実習指導，学生の課題の明確化については，対照群のほうが多かった。

【結論】実習指導者（臨床講師）の基礎看護技術演習への参加は，学生気質や学習進度を理解する機会となり，実習指導に良い影響を与えていることが示唆された。一方で，協働演習へ不参加であっても，計画性のある実習指導や学生の課題の明確化を意識して実習指導をしている実態が明らかとなった。

キーワード：実習指導者（臨床講師），教員，協働演習，実習指導 基礎看護技術教育

著者連絡先：河野かおり 獨協医科大学看護学部基礎看護学

〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町北小林 880

Email : kono@dokkyomed.ac.jp

I. 研究背景

医療技術の進歩が著しく、少子高齢化が進んだ現代において、看護師に求められる看護実践能力は、ヒューマンケアの基本的な能力、根拠に基づき看護を計画的に実践する能力、健康の保持増進・疾病の予防・健康の回復にかかわる実践能力、ケア環境とチーム体制を理解し活用する能力、専門職者として研鑽し続ける基本能力¹⁾と多岐にわたっている。看護学教育は看護実践能力を育成する基盤であり、学士課程においては、カリキュラムの構築や臨地実習の充実など教育の質保証のために様々な取り組みがなされている。中でも臨地実習は、看護実践能力を育成する上で重要な役割を果たしている。しかし、近年、リスクマネジメントの観点から、看護学生が臨地実習において身体侵襲性のある看護技術を実施する機会が制限され、多くは見学に留まる傾向がある。そのため、新卒看護師は、看護基礎教育終了時点での能力と臨床で求められる能力のギャップが大きく²⁻⁵⁾、卒業後のリアリティショックが看護実践上の困難の要因となっている⁶⁾。このような状況に対する取り組みの1つに教育と臨床の協働による看護技術演習があり、教育と臨床現場の乖離を軽減する点において、その有用性が報告されている^{7,8)}。実際に研究者らも、2012年度より実習指導者（臨床講師）と教員が協働した基礎看護技術演習を継続している。この演習では、実習指導者が学生の実態や学習進度を理解し、自己の看護技術を振り返る機会となり、臨床と教育の連携強化や人事交流に効果的であった⁹⁾。しかし、実習指導者と教員が協働した学内演習については、実習指導者が参加することの成果や問題¹⁰⁾、学生側の学びについての報告¹¹⁾が散見されるものの、実習指導者がどのように協働演習を認識しているのか、臨地実習にどのような影響があるのかを明らかにした報告は少ない。そこで、本研究では、実習指導者（臨床講師）と教員による協働演習が実習指導者（臨床講師）の実習指導に及ぼす影響を明らかにし、臨床と教育が連携した質の高い基礎看護教育システムを構築するための基礎資料としたい。

II. 研究目的

実習指導者（臨床講師）と教員による協働演習が実習指導者（臨床講師）の実習指導に及ぼす影響を明らかにする。

III. 用語の定義

臨床講師：A大学病院に勤務する看護師で学生の実習指導にあたる者

協働演習：A大学看護学部1年次生を対象とした後期開講の授業において実習指導者（臨床講師）と教員が共に行う基礎看護技術演習

IV. 研究方法

1. 対象者：A大学病院に勤務する実習指導者（臨床講師）を対象とした。2012年度～2018年度までに協働演習に参加し、A大学看護学部1年次生と3年次生の実習指導に携わった実習指導者（臨床講師）を演習群とし、2012年度～2018年度までに実習指導に携わり、基礎看護技術演習に不参加である実習指導者（臨床講師）を対照群とした。

2. 協働演習について

1) 協働演習の目的

実習指導者（臨床講師）が、看護基礎教育の目標や指導方法、指導内容を理解する機会とし、臨床と教育の連携強化を図ること。

2) 科目名と開講時期

1年次生2セメスターに開講されている看護方法論演習Ⅱ（診断—治療支援方法）

3) 協働演習への参加回数

初回のガイダンスと最終のまとめを除外した計26回。なお、1日の授業につき2時限（90分を2回）連続で演習が行われている。

4) 参加前の準備

教員は、2セメスター開講の1ヶ月前に実習指導者（臨床講師）宛に教科書、授業資料、スケジュールを送付する。実習指導者（臨床講師）には、演習までに、教科書の当該単元を読んできてもらう。演習当日は、授業開始の30分前に打ち合わせを行い、教員と実習指導者（臨床講師）が、看護技術の手順や指導のポイントについて実際の物品を使用して確認する。

5) 実習指導者(臨床講師)の演習への参加方法

学生3人1組で構成されているグループを1つ担当する。事例患者にあわせた看護援助を学生が実践する場面に立会い、学生からの質問に答え、適宜助言をする。また、指導に関する質問や意見がある場合は、演習中・演習後に教員へ伝える。

3. 調査方法

1) 調査時期

2012年度～2017年度における演習群と対照群への調査は2018年2月に行い、2018年度の演習群への調査は2019年2月に行った。

2) 調査内容

年齢、性別、看護職経験年数、看護専門教育の最終学歴、実習指導者講習会受講の有無、実習指導経験年数、協働演習参加回数、実習指導内容等について無記名自記式質問紙を用いて調査した。実習指導内容については、「そう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4段階リッカート尺度を用いた。なお、質問紙は、協働した学内演習が実習指導へ及ぼす影響についての内容分析¹²⁾を参考に研究者が作成した。

3) データ収集方法

- (1) A大学病院看護部長より各病棟師長に研究協力の説明文書を用いて研究協力を依頼した。
- (2) 病棟師長は、研究対象者に封筒に入った研究依頼の説明文書と同意書、アンケート用紙を配布した。
- (3) 研究協力に同意する者は、アンケート用紙に添付した研究協力の同意欄へレ点を記入し、アンケートに回答した。
- (4) 研究協力者は、アンケートを厳封して看護部に設置されたアンケート回収箱に投函した。

4. 分析方法

実習指導についての質問で得られた量的データは、演習群と対照群において群間比較を行った。検定方法は、属性は独立したサンプルのt検定を用い、各質問項目は χ^2 検定を用いた。演習群のみへのアンケート結果は基本統計量を

求めた。統計処理は統計ソフトSPSS (IBM SPSS Statistics25)を用い、危険率5%未満($p < 0.05$)を有意とした。

5. 倫理的配慮

本研究の趣旨と方法、研究参加の任意性、研究協力者の募集方法、プライバシーの保護、研究により生じる個人への利益および不利益ならびに危険性などについて口頭および書面で説明し、アンケートの同意欄へのレ点の記入をもって同意とした。本研究は獨協医科大学看護研究倫理委員会にて承認を得た後に開始した(看護29022)。

V. 結果

対象者数は、演習群34名、対照群32名であり、回答者数は演習群27名、対照群27名であった。回収率は演習群76.4%、対照群84.4%であった。有効回答者数は演習群で26名、対照群で27名であり、有効回答率は演習群96.3%、対照群100%であった。

1. 対象者の属性(表1)

対象者の属性を表1に示す。対象者の年齢は、演習群のほうが対照群に比べて有意に高く、看護職経験年数と実習指導者経験年数も有意に長かった。性別は、対照群のほうが男性の占める割合が有意に多かった。実習指導者講習会受講者の割合、実習指導回数については、両群間で統計学的有意差は認められなかった。

2. アンケート結果

1) 基礎看護技術演習について(表2, 3)

演習群では、協働演習に参加して役立ったことについて、「演習への参加は学生の学習状況の理解に役立った」「演習への参加は大学での教育方法の理解に役立った」「演習への参加は実習指導者としての自己成長の一助となった」で「そう思う」「まあそう思う」合わせて90%以上の回答を得ており、「演習への参加は実習指導への協力を他のスタッフに対して依頼するのに役立った」「演習への参加は上司や他のスタッフへの実習内容を報告するのに役立った」において「そう思う」「まあそう思う」合わせて60%の回答を得た。自由記載については表3

表1 対象者の属性

	演習群 (n=26)	対照群 (n=27)	p 値 ¹⁾	
年齢 (歳)	38.9±6.6	33.7±4.8	0.002	
性別 (男/女) (人)	0/26	8/19	0.000	
看護職経験年数 (年)	16.7±6.6	10.2±3.9	0.000	
実習指導者経験年数 (年)	4.2±2.4	2.1±1.2	0.001	
実習指導者講習会受講者 (%)	77%	50%	0.944	
協働演習参加回数 (回)	4.2±4.8	—		
実習指導回数 (回)				
	基礎看護学実習 I	3.0±4.4	1.6±3.9	0.264
	基礎看護学実習 II	2.3±4.6	1.5±4.0	0.490
	領域別看護学実習	3.3±5.7	3.6±6.0	0.884
	総合実習	0.9±1.1	0.7±1.2	0.613
協働演習参加年度 (人)				
	2012年度	1	—	
	2013年度	1	—	
	2014年度	1	—	
	2015年度	7	—	
	2016年度	10	—	
	2017年度	3	—	
	2018年度	3	—	
看護専門教育の最終学歴 (人)				
	大学院	0	0	0.944
	大学	3	4	0.944
	短期大学	2	1	0.944
	看護専門学校	21	21	0.944
	高等学校	0	0	0.944

注) 1) 独立サンプルの t 検定

年齢, 看護職経験年数, 実習指導者経験年数, 協働演習参加回数, 実習指導回数は平均値±標準偏差を示す

表2 演習群が協働演習に参加して役立ったこと

項目	n=26 (%)			
	そう思う	まあ そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない
演習への参加は学生の学習状況の理解に役立った	31.8	59.1	4.5	4.5
演習への参加は学生気質の理解に役立った	31.8	54.5	13.6	0.0
演習への参加は大学での教育内容の理解に役立った	27.3	54.5	13.6	4.5
演習への参加は大学での教育方法の理解に役立った	22.7	68.2	9.1	0.0
演習への参加は学生の実習指導に役立った	27.3	50.0	18.2	4.5
演習への参加は大学の教員との関係づくりに役立った	22.7	59.1	13.6	4.5
演習への参加は実習指導者としての自己成長の一助となった	22.7	68.2	4.5	4.5
演習への参加は実習指導への協力を他のスタッフに対して依頼するのに役立った	18.2	45.5	31.8	4.5
演習への参加は上司や他のスタッフへの実習内容を報告するのに役立った	13.6	54.5	27.3	4.5

表3 演習群における協働演習参加と実習指導についての自由記載

質問項目	自由記載
協働演習の体験において実習指導に役立った点	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の気質が理解できどのように接すれば良いのか参考になった。 ・学生の考え方、行動の意味が理解できた。 ・学習内容や学生の雰囲気が分かった。 ・前向きに明るく楽しそうに演習に臨んでいたり、1つ1つの行動がゆっくりで時間を気にしないで行動する等病棟での忙しさとはかけ離れている現実を知り、学生に接する上で学生の日常を目の当たりに出きて本当に良かったと思った。あまりにも学生のことを理解していなかった自分を反省した。 ・学生の知識・技術力の程度や今時の学生の気質が分かり指導方法や声かけ等臨床実習に役立った。 ・学生の気質や技術の理解度が事前に把握でき関わることができた。 ・学生が演習をどのように学んできているかを知ることで、臨床で指導する際に話すレベルを合わせることができた。 ・学生のレベルを確認し現場での実践を指導できた。 ・学生の技術レベルを把握することで指導に生かされた。 ・学生の現状、実習前の準備状況が理解でき、役にたった。 ・細かな点まで指導することが必要だと思った。 ・小グループに指導者が一人つけることができるのは指導しやすい。1人1人の理解や受け取り方が違うため技術に関しては個人指導が必要である。 ・学生の技術到達度が分かりスタッフに伝達しやすかった。 ・学校の演習で使用する物品と病棟で使用している物品が多少違う場合もあるため、実習時病棟オリエンテーションの内容を追加・修正して説明するようにした。 ・学生がよく学習している姿を見て、実習しやすい環境にもっとしようとスタッフ間で共有できた。
協働演習の体験を生かした実習指導の場面	<ul style="list-style-type: none"> ・演習で行なったことを振り返りながら学生に指導した場面があった。 ・実際に行ったことなどで学生が思い出せるように質問したり声かけをした。 ・学生の分からないこと、実習中に困っていることなどを適宜確認し、一緒に考える時間をもつことができた。 ・演習で学んだことを臨床で応用する方法として指導に生かされた。 ・ミキシング・プライミングの方法、シミュレーションの方法。 ・学部の学生が実習に来ないため生かせていない。
協働演習の体験をもとにどのように実習環境を整えたか	<ul style="list-style-type: none"> ・学生が演習で習得している技術のレベルが分かっていたのでそれに合わせて指導が行えるようにした。 ・12誘導心電図装着体験時、演習を参考に実施した。 ・説明方法、学生同士がディスカッションするスタイルの手助けをした。 ・学生のペースに合わせられるよう努力した。 ・学生の看護ケア・処置は想像以上に時間がかかることが理解できたため慌てずに行うよう指導した。 ・演習で行っていた技術は実習でできるだけ経験できるように配慮した。 ・経験してもらいたいことは積極的に学生に促した。 ・学生への声かけ、学生が看護師に話しかけやすいよう学生担当スタッフに情報共有した。 ・学生の特色をスタッフに伝達し環境を整えた。

に示す。自由記載内容のうち、『協働演習の体験において実習指導に役立った点』については、「学生のレベルを確認し現場での実践を指導できた」「学生の技術レベルを把握することで指導に生かされた」「学生の現状、実習前の準備状況が理解でき、役に立った」「細かな点まで指導することが必要だと思った」「学生の技術到達度が分かりスタッフに伝達しやすかった」という記載があり、学生の現状や実習前の準備状況、学生の考え方や行動の意味の理解についての記載があった。『協働演習の体験を生かした実習指導場面』については、「演習で行ったことを振り返りながら学生に指導した場面があった」「学生の分からないこと、実習中に困っていることなどを適宜確認し、一緒に考える時間をもつことができた」といった記述があり、協働演習を想起し、学生が行う看護技術のレベルに合わせた指導をしていることや、学生の疑問を直接確認し、共に考える指導についての記述であった。『協働演習の体験をもとにどのように実習環境を整えたか』については、「学生が演習で習得している技術のレベルが分かっていたのでそれに合わせて指導が行えるようにした」「学生の看護ケア・処置は想像以上に時間がかかることが理解できたため慌てずに行うよう指導した」「学生への声かけ、学生が看護師に話しかけやすいよう学生担当スタッフに情報共有した」という学生の気質や学習レベルに合わせた学習支援に関する記述があった。

2) 実習指導について (表4, 5)

看護学実習指導についての質問項目全てにおいて、演習群と対照群との間で統計学的有意差は認められなかった。「受け入れ学生の特性を把握した上で実習指導にあたった」「達成した目標と未達成の目標を学生と確認できた」「学生個々の反応に合わせた実習指導ができた」「学生同士の協力関係を促進した」「実習における自分と教員の役割について確認や調整ができた」「実習指導方針について理解して実習指導をした」「教員との指導に一貫性を持たせることができた」の項目では、「そう思う」「まあそう思う」を合わせた回答者の割合は、演習群が

対照群に比べて10%以上多かった。

一方、「学生に行われている看護ケアの根拠を説明した」「学生の学習状況に合わせて計画性のある実習指導ができた」「今後、実習指導を行う際に知っておきたい、もしくは経験しておきたいことがある」の項目では、「そう思う」「まあそう思う」を合わせた回答者の割合は、対照群の方が10%以上多かった。『今後実習指導を行う際に知っておきたい、経験しておきたいこと』について具体的な回答の一部としては、演習群では「学生の事前学習の進み具合」、対照群では「臨床実習指導者講習会に参加したい」「実習の目的・目標、どのような患者を受け持ちたいのか、外来実習を通して、病棟実習にどう生かしていきたいのか」「学生の個性」「学生が介入していい範囲を明らかにしてほしい」という記述があった。(表5)

VI. 考察

1. 実習指導者(臨床講師)の協働演習への参加が実習指導へもたらす意義

本研究では、実習指導者(臨床講師)と教員による協働演習が実習指導へ及ぼす影響を明らかにするためにアンケート調査を行い、演習に参加した群と不参加であった群を比較した。その結果、演習への参加が、学生気質や看護技術習得レベルを確認する機会となり、実習指導や教員との関係作りにも寄与していることが示唆された。

今回の結果では、対象者の看護専門教育の最終学歴は、看護専門学校が約80%を占めており、実習指導者の多くが、学生と教育背景が異なることを示している。教育背景が異なるということは、看護基礎教育課程の修学年数や、学校独自のディプロマポリシー、ディプロマポリシーに基づくカリキュラム編成等が、所属していた教育機関によって異なることを意味し、演習内容、学習方法も異なっていると推察する。そのため、実習指導者(臨床講師)は、看護基礎教育課程で経験した自分の学習経験と、指導対象である学生の学習進度や学習方法に戸惑いを感じた可能性も考えられる。また、実習指導

表4 実習指導の具体的な関わり方と役割について

NO.	項目	上段：演習群 (n=26) 下段：対照群 (n=27)				p値 ¹⁾
		と思う	まあ と思う	あまり そう思わない	そう思わない	
1.	「学生を理解しよう」という意識で実習指導にあたった	30.8	65.4	0.0	3.8	0.393
		40.7	48.1	7.4	3.7	
2.	受け入れ学生の特徴を把握した上で実習指導にあたった	26.9	61.5	7.7	3.8	0.358
		18.5	51.9	25.9	3.7	
3.	学生が講義や演習内容を思い出して考えられるように質問した	19.2	65.4	11.5	3.8	0.598
		7.4	70.4	18.5	3.7	
4.	学生に、行われている看護ケアの根拠を説明した	26.9	53.8	11.5	3.8	0.700
		25.9	66.7	3.7	3.7	
5.	学内で学習した看護技術が臨床でどのように実践されているのか説明した	30.8	57.7	7.7	3.8	0.174
		7.4	74.1	14.8	3.7	
6.	学生に修得してほしい知識を分かりやすく説明した	26.9	65.4	3.8	3.8	0.729
		22.2	74.1	0.0	3.7	
7.	学生に修得してほしい看護技術の手本を見せた	23.1	61.5	15.4	0.0	0.386
		22.2	70.4	3.7	3.7	
8.	学生が実施したことのない看護技術の見学の機会をつくった	23.1	57.7	15.4	3.8	0.996
		25.9	55.6	14.8	3.7	
9.	学生の学習状況に合わせて計画性のある実習指導ができた	7.7	42.3	46.2	3.8	0.493
		3.7	63.0	29.6	3.7	
10.	困難に直面している学生に解決の方向性を示すことができた	3.8	69.2	23.1	3.8	0.996
		3.7	66.7	25.9	3.7	
11.	学生が現在の目標達成について自己評価できるように促した	7.7	53.8	34.6	3.8	0.940
		3.7	55.6	37.0	3.7	
12.	達成した目標と未達成の目標を学生と確認できた	7.7	69.2	19.2	3.8	0.421
		3.7	51.9	37.0	7.4	
13.	学生の自己課題を明確にする指導ができた	7.7	42.3	46.2	3.8	0.979
		7.4	48.1	40.7	3.7	
14.	実習における学習内容についてフィードバックができた	11.5	65.4	19.2	3.8	0.916
		7.4	63.0	25.9	3.7	
15.	学生に対して具体性のあるフィードバックができた	7.7	53.8	34.6	3.8	0.916
		3.7	51.9	40.7	3.7	
16.	フィードバックの際、学生の反応を意識することができた	7.7	61.5	26.9	3.8	0.967
		7.4	55.6	33.3	3.7	
17.	学生個々の反応に合わせた実習指導ができた	11.5	69.2	15.4	3.8	0.662
		11.1	55.6	29.6	3.7	
18.	病棟内の看護技術の方法を統一した	0.0	61.5	34.6	3.8	0.218
		11.1	40.7	40.7	7.4	
19.	学生同士の協力関係を促進した	3.8	65.4	26.9	3.8	0.769
		7.4	51.9	37.0	3.7	
20.	演習へ参加した体験をもとに学生が実習しやすい環境を整えた	11.5	42.3	42.3	3.8	-
		-	-	-	-	
21.	学生の手本となるよう意識して実習指導にあたった	15.4	69.2	11.5	3.8	0.938
		22.2	63.0	11.1	3.7	
22.	ケアの効果や看護の素晴らしさを実感できる場面を見せるよう努めた	23.1	61.5	11.5	3.8	1.000
		22.2	63.0	11.1	3.7	
23.	演習へ参加した体験を実習指導に生かせたと思う指導場面があった	7.7	34.6	53.8	3.8	-
		-	-	-	-	
24.	今後、実習指導を行う際に知っておきたい、もしくは経験しておきたいことがある	0.0	19.2	73.1	7.7	0.493
		0.0	63.0	0.0	37.0	
25.	実習目的・目標について病棟スタッフの理解を得られるよう働きかけた	15.4	73.1	3.8	3.8	0.756
		25.9	63.0	7.4	3.7	
26.	学生の学習状況や指導状況を他の病棟スタッフと共有した	7.7	69.2	19.2	3.8	0.957
		7.4	66.7	18.5	7.4	
27.	実習における自分と教員の役割について確認や調整ができた	15.4	69.2	11.5	3.8	0.648
		7.4	66.7	22.2	3.7	
28.	実習指導方針について理解して実習指導をした	11.5	80.8	3.8	3.8	0.597
		11.1	70.4	14.8	3.7	
29.	教員との指導に一貫性を持たせることができた	15.4	65.4	15.4	3.8	0.116
		0.0	63.0	33.3	3.7	

1) χ^2 検定

表5 臨床実習指導に関する質問の自由記載

質問項目	自由記載
今後、実習指導を行う際に知っておきたい、もしくは経験しておきたいこと	<div data-bbox="507 282 579 309" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">演習群</div> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の事前学習の進み具合. ・学生の気質. <div data-bbox="507 398 579 425" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">対照群</div> <ul style="list-style-type: none"> ・講習会に参加したい. ・臨床実習指導者講習会に参加したい. 学生が実習を通してどのようなことを学び、どのように成長したいのか考えていること、思っていることを知りたい. 指導者にどのようにかかわってもらいたいのか、求められていることを聞いてみたい. ・実習に向けてどのようなかかわりを準備しているかわかるように事前の打ち合わせで情報交換できると実習がスムーズにいくことが多い. その為、打ち合わせの際に学生の個性など先生に把握して頂いてよこしてもらえるとありがたい. ・学生が介入している範囲を明らかにしてほしい. (点滴作成など) グループの全員が理解出来る最低限のレベルは揃えてほしい. ・実習の目的・目標、どのような患者を受け持ちたいのか、外来実習を通して、病棟実習にどう生かしていきたいのか. ・注意した方が良い生徒には教員と相談し指導者が関わるようにしたい.

者（臨床講師）は、看護教育課程を修了後は臨床経験を経ているため、学生との年齢が離れている。菱沼ら¹³⁾は、看護系大学1年生を対象に生活習慣と生活体験を調査し、90%以上が食器洗い、料理、洗濯、自分の部屋の掃除等を経験している一方で、子どものおむつ替え、お年寄りの世話、病人の世話の体験が少なく、お盆を使う、シーツをのばす、湯をかき回してから湯舟に入る、食事前の手洗いが習慣化されていないと報告している。しかし、実習指導者（臨床講師）は、高齢者や患者の世話に従事し、感染予防の手洗いを習慣化するなど、学生の習慣化されていない行動を常日頃から行っている。このように、学生が習慣化していない行動を、逆に実習指導者（臨床講師）は習慣化している状況にある。そのため、学生世代と関わる際、特に患者を対象とした看護援助場面においては、戸惑いやギャップを感じることもあるかもしれない。本山ら¹⁴⁾は、効果的な実習指導を行うためには、授業内容、学生の特性、日頃の態度など多角的な視点からの学生理解が重要であり、その機会が学内演習への参加体験であると述べている。協働演習への参加は、学生との年齢や教育背景、生活背景によるギャップを埋め、学生気質の理解、知識や技術の習得度の理

解を促し、学生の学習支援に役立つことができているのではないかと考える。また、「演習への参加は実習指導者としての自己成長の一助となった」の回答が90%以上であった。澤田は¹⁵⁾、看護師の学内演習への参加は、学生理解を深め、学生との関わりの中で指導のやりがいを体験する機会であると報告している。このことから、協働演習への参加は、実習指導のやりがいをもたらし、指導力の向上にも寄与しているのではないかと考える。

今回の調査では、協働演習への参加は、学生が患者役へ接する態度を実際に見る機会となり、学生の気質や、看護技術の知識と技術の習得レベルを理解する機会であることが示唆された。一方で、「実習指導への協力を他のスタッフに対して依頼するのに役立った」「上司や他のスタッフへの実習内容を報告するのに役立った」者は、約60～70%であり、他の項目よりも少なかった。このことから、協働演習で得た学生の気質や学習進度等について、他のスタッフと共有することが今後の課題として挙げられた。臨地実習では、他のスタッフも実習環境の一部として学生を育てていく、という認識を強められるように、教員側が働きかけていくことも必要である。

演習群では、実習指導の具体的な関わりと役割の中の「学生同士の協力関係を促進した」の項目で「そう思う」と回答した者が対照群と比べて約10%多かった。基礎看護技術演習では、主体的学修能力の育成を目指し、知識の定着や看護技術の実践、振り返り、ディスカッション等をメンバーで協力して行うグループ学習を行っている。実習指導者（臨床講師）に対しては、授業前の打ち合わせにおいて、学習形態と教員が果たす役割について説明している。実習指導者（臨床講師）が、演習の方法・内容やグループ学習について理解することが実習指導にも反映されているのではないかと推測され、実習指導者（臨床講師）が協働演習に参加することの意義は大きいと考える。

2. 演習群と対照群の比較から考えた実習指導の実態と今後の課題

対象者の平均年齢は、演習群のほうが対照群に比べて有意に高く、看護職経験年数と実習指導者経験年数も有意に長かった。今回の研究では、演習群と対照群とで、均一な属性を有した集団の比較ができなかった。また、演習への参加から本研究協力までの期間が1~7年と対象者により異なったことも結果に影響した可能性がある。

演習群において、「達成した目標と未達成の目標を学生と確認できた」「学生個々の反応に合わせた実習指導ができた」の項目で「そう思う」「まあそう思う」と回答した者が約10%多かった。この結果は、協働演習において、個々の学生とじっくりと丁寧に関わる体験をしたことが背景にあるのではないかと推測する。Kathleen Bら¹⁶⁾は、教員は学習活動において、学生がどのような知識や技術をどのレベルまで修得しているかということや、学習者の特性を考慮しながら指導を行っており、すべての学生がすべての学習活動を同じように完了する必要はなく、教員は学生のニーズに最も適した学習活動を個別的に考える責任がある、と述べている。演習群の実習指導者（臨床講師）は、協働演習において学生と丁寧に関わる教育体験の機会を得ており、この体験をもとに、臨床実習に

においても学生の反応を観察し、その反応に合わせた実習指導や、学生との相互作用のもと、学生が目の前の課題を1つ1つクリアできるような実習指導がなされているのではないかと考える。実習指導者と教員とで指導方法や指導内容に相違があると、学習者は困惑し、学習意欲の低下や目標到達度の低下が生じる恐れがあるため、二者間の連携が不可欠である。

林ら¹⁷⁾は、看護教員と十分に連携ができていた実習指導者は、役割葛藤・役割曖昧さの得点が有意に低く、実習指導上の情報交換や実習指導の役割分担ができると述べている。協働演習では、実習指導者と教員の間で、指導方法や指導内容の乖離が生じないように、演習前に詳細な打ち合わせを行い、演習中・演習後において、現場における看護技術の方法と、教員が指導する方法の違いなどに対して疑問が生じた時には、意見交換を行っている。このような機会を持つことが、臨床の場における関係性の構築や指導内容について共通理解する一助となり、実習指導者（臨床講師）が、実習指導者としての役割を明確にしつつ、教員との指導方法の一貫性をもつ重要性を理解して、実習指導にあたるのではないかと考える。

一方、対照群において、「そう思う」「まあそう思う」を合わせた割合が演習群に比べて約10~20%多かった項目は、「学生に行われている看護ケアの根拠を説明した」「学生の学習状況に合わせて計画性のある実習指導ができた」であった。対照群は基礎看護技術演習に参加した経験がないため、指導対象である学生の気質や看護技術の習得レベルを直接知る機会が少ない。そのため、実習指導の際は、学生に看護ケアの根拠を説明しながら、実習の進行に合わせて学生個々の特性や学習状況を確認し、計画して実習指導を行っているのではないかと推測する。学習活動とは1つひとつの積み重ねである。「学習計画を立てる」とは、学習者の知識や技術の向上につながるように、学習活動を順序よく組み立てることを意味している¹⁸⁾。本研究結果からは、基礎看護技術演習に不参加であっても、学生の学習状況をふまえながら学習支援を

丁寧に行っており、一定の質が保証された実習指導が行われている実態が明らかになったのではないかと考える。

基礎看護学実習では、主に、日常生活援助技術を行う機会が多い。しかし、実習指導者（臨床講師）が参加した協働演習は、診断・治療を支援する看護技術演習であった。そのため、各調査項目において、演習群と対照群で有意差が認められなかったのは、協働演習での学習内容と実習における実践を結び付けて指導する機会が少なかったことが影響しているのではないだろうか。また、演習終了後に、実習指導者（臨床講師）と教員が、学生との関わり方や指導内容について振り返る時間の確保が困難であった。岩井ら²⁰⁾は、実習指導者に対するリフレクションの必要性を述べており、演習参加のみでは、演習での教育体験を実習指導に活かすことに繋がりがなかったのではないかと考える。今後は、演習中および演習後に指導を振り返る時間の確保、実習で実施する頻度の多い看護技術の演習や、実習オリエンテーションなど、実習指導に深く関係するプログラムへの参加ができるように検討する必要がある。

今回の結果から、協働演習に参加した実習指導者（臨床講師）は学生気質や学生の学習状況の理解を深めた上で実習指導にあたることができ、かつ教員との連携も強化され、より充実した実習指導ができるのではないかと推察する。臨地実習は、看護技術の実践のみならず、患者情報を基にしたアセスメント、科学的根拠に基づいた思考、看護過程の展開がなされ、学習が進む。今後は、学生の思考のプロセスへの指導の実際が明らかになるような調査項目を追加し、学生側の評価も合わせて調査していきたい。

Ⅶ. 結論

実習指導者（臨床講師）の基礎看護技術演習への参加は、学生気質や学習進度を理解する機会となり、実習指導に良い影響を与えていることが示唆された。一方で、演習へ不参加であっても、計画性のある実習指導や学生の課題の明確化を意識して実習指導をしている実態が明らか

かとなった。

謝辞

基礎看護学・臨床看護学実習ならびに基礎看護技術演習の趣旨を理解し、演習指導・実習指導に多大なるご協力を賜りました A 大学病院実習指導者の皆様に感謝申し上げます。また、本調査へのご協力に深謝申し上げます。

本研究結果の一部は、第 46 回協働医学会学術集会（2018 年）にて発表した。

文献

- 1) 厚生労働省「看護基礎教育の充実に関する検討会」平成 19 年 4 月 20 日, 2019/6/10, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>
- 2) 三浦友理子, 松谷美和子, 他: 学士課程卒業看護師が卒後 1 年間に必要であると認識している臨床看護実践能力 2 年目看護師の振り返りに基づく面接調査の分析. 聖路加看護学会誌 17 (2): 3-12, 2014.
- 3) 高屋尚子, 松谷美和子, 他: 看護系大学新卒看護師に求められる臨床看護実践能力 新卒看護師育成経験のある看護師への面接調査. 聖路加看護学会誌 17 (1): 27-34, 2013.
- 4) 荒木厚子, 吉田知美, 他: 離職率 0 下での自己評価による新人の看護技術到達度調査 1 年～2 年目への教育課題. 日本看護学会論文集 看護教育 41: 14-17, 2011.
- 5) 滝島紀子, 森智恵子: 新卒看護師の看護実践上の困難点と仕事の現場で求められている能力の関係. 川崎市立看護短期大学紀要 20 (1): 33-43, 2015.
- 6) 山口曜子, 徳永基与子: 新人看護師の離職につながる要因とそれを防ぐ要因. 日本看護医療学会雑誌 16 (1): 51-58, 2014.
- 7) 滝内隆子, 小松妙子, 他: 臨床看護師との協働による看護技術指導の評価. 看護教育 52 (9): 766-771, 2011.
- 8) 河野恵子, 藤原敏恵, 他: 技術演習の授業に臨床指導者が参加することによる効果. 看護人材教育 9 (3): 87-93, 2012.

- 9) 河野かおり, 板倉朋世, 他: 臨床実習指導者と教員が協働した基礎看護技術演習の実践報告. 獨協医科大学看護学部紀要 11: 65-75, 2017.
- 10) 小西真人: 看護技術の学内演習に臨床看護師が参加することによる成果・課題 2003~2013年の文献を通して. 岐阜看護研究誌 7: 87-96, 2015.
- 11) 山本加奈子, 吉田和美: 臨床看護師のサポートを受けた基礎看護技術演習での学生の学びと継続に向けた課題. 日本赤十字広島看護大学紀要 16: 1-10, 2016.
- 12) 渡邊郁子, 滝内隆子, 他: 基礎看護技術演習に協働した臨床看護師の臨地実習指導への影響. 岐阜看護研究会誌 6: 25-34, 2014.
- 13) 菱沼典子, 佐居由美, 他: 看護系大学1年生の生活習慣と生活体験に関する全国調査. 聖路加看護学会誌 15(1): 27-34, 2011.
- 14) 本山仁美, 櫻井理恵, 他: 臨床看護師の演習参加による成人看護学実習指導での効果—看護師と看護学生の評価から—. 埼玉医科大学看護学科紀要: 81-88, 2017.
- 15) 澤田和美: 看護学実習における指導および学生の学びに関する国内文献の検討—形成的アセスメントの観点から—. 横浜創英大学研究論集 3: 1-10, 2016.
- 16) Kathleen B. Gaberson, Marilyn H. Ohermann 著, 勝原裕美子, 増野園恵, 他訳: 臨地実習のストラテジー, 76, 医学書院, 東京, 2002.
- 17) 林久美子, 高橋由起子: 大学病院に勤務する臨地実習指導者の役割葛藤・役割曖昧さの現状と属性・実習指導体制との関連. 日本看護学教育学会誌 27(3): 1-12, 2018.
- 18) 岩井眞弓, 内山久美, 他: 看護学実習における指導プロセスの関連要素—1996年から2009年の国内先行文献の分析—. 保健科学研究誌 9: 15-28, 2012.